



2 絵の中の自分

思えば、自分の視力が正常に機能していると実感したことがない。

ずっとそうだった。

どうしてか、眼鏡の度がうまく合わないことがつづき、それだけではなく、もっと心情的な問題として、視界に映り込むものと自分の認識がフィットしなかった。

自分はあらゆるものを正確に捉とらえていない。いつでも、そんなジレンマを抱えてきた。

「さて、それはどうだろうな」

眼科医の友人であるタクマに諭された。

「医者として言わせてもらおうと、アンタの眼めはあらゆるものを正しく捉とらえていると思う。ごく普通に視力は機能しているよ」

タクマは無造作に白衣の袖そでをまくりあげた。

「だけど、俺の見える世界とアンタの見える世界が完全にイコールで結ばれることはない。だ

から、何が正しいのかは誰にも分からん。というか、こいつには答えがないんだよ」

それはよく分かっていた。分かっているけれど、答えがないからこそ、何度も考えてしまう。

人は自分の眼を自分の眼で見ることができない。もちろん、鏡に映して見ることはできるが、それはあくまでも鏡に映ったさかさまの眼だ。

「いや、それを言うなら眼だけじゃないだろう」
タクマが自らの顔を指さした。

「口も鼻も耳も——あとはなんだ？——そう、背中だって、鏡なしでは見られない」

いや、そうではなく、もっと心情的な問題なのだ。眼が眼を見られないように、「あるもの」は「あるもの」自身を見られない。そのことが、ずっと引つかかっていた。

逆に言うと、僕の眼は僕の眼を見たことがないのだから、「きつと、ぼんやりした眼に違いはない」と思い込んでいるだけなのだ。その昔——、「ぼんやりなんかしてないわ」

僕の眼をまっすぐに見て、そう言ってくれた人

がいた。

多々^{たた}さんだ。

「あなたの眼はぼんやりしているんじゃない、ずっと遠くの方まで見ているんだと思う」

多々さんは僕が中学生のときから通いつめていた港町の映画館——〈銀^{ぎん}星^{せいざ}座〉の劇場窓口で働いていた。

「わたしの肩書きは、もぎり嬢よ。もう、お嬢さんと呼ばれる年齢ではないけどね」

僕には多々さんがいるところ、すなわち、劇場の窓口が特別な場所に見えた。

というより、僕には〈銀星座〉という古びた映画館そのものが特別な場所で、港町の裏通りに面して建っていたが、そこだけ別の時間と空間が町に組み込まれているように感じられた。

そもそも、映画館の暗がりで目にするものは、ここではないどこか別の時間の別の場所で起きたことなのだから、当然といえば当然かもしれない。でも、そうした別世界の入口が劇場の窓口であり、生まれたときからずっとそこでそうしている

といった風情で、いつも多々さんが座っていた。だから、お金がないときは、窓口で多々さんと話をするだけでよかった。そのわずかな時間で特別な何かを味わえた。

「こんにちは」と声をかけると、
「こんにちは」と声を返してくれる。

僕は多々さんの声を聞きたかった。そもそも、声というものに興味を抱くようになったのは、窓口の中からくぐもって聞こえる多々さんの声と、その奥の暗がりの中に響く声——スクリーンから聞こえてくる声に魅^ひかれたからだ。

そのころは、よもや自分が声の仕事をするようになるとは微塵^{みじん}も思っていなかったが、おかしなことに、僕はあの映画館に通って、何かを観^みた記憶より、何かを聴いた記憶の方があざやかによみがえる。

なにしろ、僕の眼はスクリーンに映るものをしつかり捉えていなかった。すべてがどこことなくほんやりとしてピントが合わなかった。

最初のうち、映画館が古びているせいで、フィ

ルムもぼやけているのだと思っていた。でも、多々さんに、「今日の映画はどうだった？」と訊かれるたび、「ちよつとぼやけていた」と僕が答えるので、おかしいのはフィルムではなく視力のせいなのだと多々さんが気づいた。

「ソガ君は眼鏡をかけた方がいいかもね」

それで、そのとき初めて〈卓馬眼科院〉に行つたのだ。まだタクマの父親が健在で、いまのタクマとそっくり同じ声、同じ顔で、「アンタの眼はね」と中学生の僕に言った。

「アンタの眼は面白いよ」

それがどういう意味であったのか、いまだによく分からない。ただ、似たようなことを多々さんも言っていた。

「ソガ君の眼は他の人とぜんぜん違って、すごく面白い。なんて言うのかな、遠い遠い昔の方とはるか彼方の未来の両方を見ている感じ」

やはり、意味が分からなかった。

「どっちにしろ、僕には僕の眼が見えません」

「じゃあ、わたしが見せてあげようか」

多々さんはあっさりとそう言った。

「あなたを描いてあげる」

それもまた最初は意味が分からなかったが、

「わたし、冗談で言ってるんじゃないのよ。本当を言うと、ソガ君の眼をずっと描きたいと思ってた」

多々さんは僕の眼をじっと見ていた。こちらをじっと見ている多々さんの眼はとても澄んでいて、それこそ僕にははかり知れない、この世とは違う別の世界を見通せるように見えた。そんな眼に見つめられて、

「描かせて」

と懇願されたら、意味が分からなくても、誰だって首を縦に振ってしまう。

「じゃあ、わたしのアトリエに来てくれる？」

そのときまで、多々さんが絵を描く人であるとは知らなかった。が、多々さんのアトリエ——それは小ぢんまりとした一軒家だった——に足を踏み入れると、見覚えのある映画館の看板絵が何枚も

壁に立てかけられていた。

「そうなの」

多々さんはどこか不服そうにそれらを眺めていた。

「これが、わたしのもうひとつの仕事」

そういえば、〈銀星座〉の正面玄関に掲げられた「ただいま上映中」の看板には、俳優たちのポートレートや映画の一場面を描いた手描きの絵が添えられていた。

「でも、それはあくまで映画を宣伝するためのもの。わたしが描きたい絵ではないの。わたしが描きたいのは——」

アトリエの隅から取り出してきた何枚かの小ぶりの絵は、見慣れた看板絵とはまるで印象が違う写実的なものだった。

「こんなふうにソガ君を描きたいんだけど」

そのとき僕は十七歳だった。ちょうど、ベニーの魂が自分の中に入り込んできた頃だ。

なんとなく話の流れで多々さんのアトリエを訪ねてしまったけれど、いざとなると、自分が絵の

モデルをするなんて恐れ多いことに思えた。

「本当に僕でいいんでしょうか」

「だって、見たいんでしょう？ 自分の眼を」

「ええ、そうなんですけど——」

アトリエの窓から川が見えた。

そこは川沿いの道を西島町にしじまから堺町さかいへのぼったところで、家から歩いて二十分ほどのところだった。静かな住宅街の中を川がほんの少し蛇行しながら流れている。

だから、そこが自分の生まれ育ったテリトリーとひとつながりのところであるとよくよく分かっていたのだが、映画館の劇場窓口が特別な場所であつたように、多々さんのアトリエは知らない世界に参入する窓口であるかに思えた。

そこでしかし、記憶は一旦いったん、途絶える。

それから多々さんがどんなふうになふうに画材やキャンバスを準備したのか、どんな心持ちで僕は多々さんに向き合つたのか、最初の日の肝心な記憶が抜

け落ちている。

たぶん、極度の緊張で頭の中が空っぽになってしまったのだろう。

ただひとつ覚えているのは、窓の向こうのすぐそこに川が流れているという、それこそ一幅の絵画を思わせる記憶だった。その流動する水のイメージが安らぎと不安を同等にもたらしていた。

それから週に一度か二度、多々さんの仕事が見舞いの日に、アトリエに通ってモデルをつとめた。学校の帰りにそのまま立ち寄りたり、ときには、土曜日や日曜日に午前中から始めることもあった。絵を描いているあいだ、多々さんは何も言わず、当然ながら、僕も黙っていた。それはとても残念なことだ、できれば少しでも長く多々さんの声を聞いていたかった。

低めで適度な重みがあり、ところどころ言葉が鼻へ抜けて声色が二重になるような一瞬がある。穏やかでありながら説得力があり、こちらがどんな状態にあっても、その声が水のように体に染み

渡った。

もし、多々さんが、「皆さん、今晚は」とラジ
オのDJをしていたら、僕は熱心なリスナーにな
っていたに違いない。

そうした連想がマイクの前に座った自分を動か
していたのだろう。いつものように、

「夜ふかしの皆様、今晚は」

と番組を始め、フリートークの時間になったと
き、自然と多々さんの話をしていた。もちろん、
名前は伏せてTさんとし、自分がこうして声の仕
事をするようになったのは、あるいはTさんの声
に魅かれていたからだと言え、マイクに向かって話した。

（あれ、どうしてこんな話になったんだっけ？）

そう思いながらも、修正のきかない生放送は自
分の中から湧き出^わてくる言葉に乗っかっていくし
かない。

とはいえ、頭の中に冷静な自分がもうひとりい
るわけで、放送時間の配分を鑑^{かん}み、映画館や劇場
窓口の話はせず、Tさんの声の話だけをすればい

いのだとコントロールしていた。

にもかかわらずだ。

にもかかわらず、口が勝手に動いて、Tさんが無名の画家であったことを話し、

「そういうわけで、僕は十七歳のときに絵のモデルをしたことがあるんです」

と言っていた。

モデルをしたのはその一度きりで、貴重な体験であったと思います。

ただ、その絵が完成したあとどうなったのか、どこかに展示されたことがあるのか、それとも、Tさんのアトリエに眠っているのか、そのところは分かりません。

考えてみると、不思議な話です。

絵の中の自分は十七歳で、もし、あの絵がいまどこかにあるのなら、そこに十七歳の自分が閉じ込められているんですから――。

話しながら、（本当にそうだな）と冷静な自分

が頷うなずいていた。

あれから、あの絵はどうなったのか。

というより、多々さんはいまどこでどうしているのだろう。

どこが記憶の最後であったか、順番が分からなくなる。

〈銀星座〉の閉館が決まり、映画館ごと、あの窓口と多々さんがいなくなってしまったこと――。

ある日、ふと思いついて、川沿いに多々さんのアトリエまで歩いてみたら、アトリエのあった場所に「多々」ではなく、知らない表札を掲げた真新しい家が建っていたこと――。

どちらが先だったか。

いずれにしても、多々さんは何も言い残すことなく、突然、いなくなってしまった。

「ほら――」

と多々さんの声だけが、どこからか聞こえてくる。

「これがソガ君の眼だよ」

絵が完成したとき、多々さんは描き上がった絵

を僕に見せ、

「ひとつもぼんやりなんかしていないでしょう？
前にも言ったけど、昔々と未来の両方を見ている
眼なのよ」

僕には多々さんの言っている意味がもうひとつ
分からなかったけれど、キャンバスに定着された
自分の姿は鏡の中に映る自分とはまるで違って見
えた。こんなふうに言うのはおかしいことかもし
れないが、絵の中の自分は、まるで生きているか
のようだった。

あの奇妙な感覚をどう言えばいいのか。

絵の中の自分はいまの自分ではない。

いまの自分は絵の外のこちら側にいる。

絵の中の自分は、絵を描いていた時間が何層に
も積み上がった自分で、数時間前と何日か前と何
ヶ月か前に存在した過去の自分の集積だった。

それはしかし、絵の外を生きているいまの自分
にも言える。生きているというのは、きつとそう
いうことだ。いくつもの過去の自分が積み重なっ
ていまに至っている——。

そんな、ややっこしいことをつい考えてしまったのは、絵の中の自分がいまにもリアルだったからで、多々さんの言うとおり、僕の眼はまさにこのとおりであるだろうと信じられた。

たしかに僕の眼が僕の眼を見ていた。

多々さんが見せてくれたのだ。

*

ラジオのいいところは——特にそれが生放送であつた場合——どうしてこんな話をしてしまったんだろう、と舌打ちすることがあつても、声はそれきり消えてしまうのだから、舌打ちもそれきりになる。

が、熱心なりスナーというのが、ありがたいことに僕の番組にもいらっしやつて、

「先日の放送を聴きました」

と、わざわざ葉書を書いて送ってくださった方がいたのだ。これがもし、メールで送られてきたものであつたら、あるいは、とり上げることはな

かったかもしれない。

「曾我^{そが}さんが絵のモデルをされたことがあるというお話を聞き、ひとつ、思いあたることがあったのです」

惚^ほれ惚^ほれとするくらい丁寧な字で書いてくださっていたので、思わず、全文、読み上げてしまった。

「曾我さんのことは〈バーガー・ログ〉で知りました。わたしも食べ歩きが好きなので、じつにおいしそうにハンバーガーを食べている曾我さんの写真を拝見し、紹介されているお店を何軒か訪ねたこともあります。

ですので、曾我さんがどんなお顔をされているのか——なるほど、絵描きさんがモデルにしたくなるような男前でいらっしやるのも存じ上げておりました。

そのうえで、先日の放送を聞き、半年ほど前に、

とある美術館で出会った一枚の絵を思い出ししました。

あれ？ この絵の中の人って、曾我さんによく似ているなあ、と思ったのです。

よく似ている、というより曾我さんではないのかな、と。

ただ、わたしは（バーガー・ログ）の写真で見かけしているだけなので、はっきりしたことは分からないのですが、少なくとも最近の曾我さんより若いように見えました。

もしかして、若いときの曾我さん？

そう思ったのです。

でも、そのときはそれまででした。この世には、自分とよく似た人が三人いると言いますし、現にわたしの顔はわたしが飼っているボーダー・コリーのアガサとよく似ています。

すみません、余計なことを書きました。

でも、もし曾我さんが番組でおっしゃっていた絵をお探しいましたら、もしかして、もしかするかもしれません。

仮に違っていたとしても、やはり世の中には自分とよく似た人がいるものだなあと実感できるかと思えます」

放送を終えたあとで気づいたのだが、葉書の隅に小さな字で、「とある美術館」の名前と住所が書き添えられていた。

知らない美術館だった。

どうしてだろう。その美術館を自分が知らないということが逆に気になった。

もし、この葉書を書いてくれたリスナーが言うとおり、その美術館に展示されていた絵が多々さんが描いた十七歳の自分であったとしたら、なんというか、自分の知らないところに十七歳の自分が——自分の分身が迷い込んでいるようなそんな気がした。

おかしい話だ。

単に自分がその美術館を知らないだけで、どう考えても、一般的にはよく知られた美術館であるに違いない。

もしかすると、半年前の展示は多々さんの展覧会であったかもしれない、であるなら、これを機に多々さんとの再会が叶うかもしれない。

それにしても、自分の知らないところで自分の顔が取り沙汰ざたされているのが妙だった。

「もつと顔を売らなきゃ」

そう言ったのは妹だが、僕が売りものにしたいのには自分の声であって顔ではない。件の熱心くたんなりスナーは僕の顔を「男前」などと書いていたが、これまで一度としてそんなふうに言われたことはない。

「お父さんによく似ているね」

「親父おやしさんが化けて出てきたのかと思ったよ」

「ああ、そうか、君は息子の方だったのか」

たいてい、そんな感じだ。

では、父は男前だったのかというところというわけでもない。人望は厚かったと思う。なにしろ、楽団のリーダーだったし、メンバーは皆、父を慕っていた。

リーダー・シップ、キャプテンシー、統制力、指導力——自分にはそうしたところがまったく欠けている。妹にもたびたび指摘されていたが、

「兄さん、最近、ネットでバーガー・マイスターとか言われてるみたいよ」

「マイスター？」

「いや、だから、ハンバーガーのことなら俺に任せておけてことじゃない？」

それは、はたして喜ばしいことなんだろうか。

たしかにハンバーガーは好きだが、マイスターなどと呼ばれるほど精通しているかどうかは分からない。たぶん、そこまでじゃない。はっきり言って、食べ歩きについても懐疑的で、単に子供の頃に食べたハンバーガーが忘れられず、あの味をもう一度味わいたいだけなのだ。

あれは本当に素晴らしくおいしかった。

〈銀星座〉の近くにあった〈チャーリー〉という店で、チェーン店ではなく、店長はアジア系のイギリス人だった。詳しい事情は分からないが、何かよからぬことを仕出かして追われていたらしく、

チーズ・バーガーをつくっている途中で失踪し、
そのまま行方をくらましてしまった。

あのチーズ・バーガーは掛け値なしに世界一おいしいかった。つくりかけになってしまった最後のひとつを注文した客を心から気の毒に思う。もし、それが自分であったら、あるいは、自ら「マイスター」を名乗り、自分もまたあの店長を追いかけていたかもしれない。

まあ、そこまでの情熱はないとしても、

「あのハンバーガーをもう一度」と、つぶやくことはある。

どうやら自分はいつでも何かを探していて、探すばかりで見つかったためしがない。